

引き抜き屋の帰還

雫井脩介

第一回

引き抜き屋の苦心（一）

1

かのこさほ
鹿子小穂がオフィスの執務室で資料の整理をしていると、ノックの音がして、秘書の平岡碧衣ひらおかあおいが顔を覗かせた。のぞ

1

「忘年会なんですけど」

「お、そんなのやるんだ」

「やります」

小穂がヘッドハンターに転身し、このサーチファーム「フォルテフロース」に入ってから半年が経ち、気づくと年の瀬が迫っていた。

「早いね、一年は」

「本当ですねえ」

今年の初めはまだ小穂は、父が経営するアウトドアメーカー「フオーン」で働いていた。日次報告で上がってくるダウンウェアの売

れ行きに一喜一憂いつきいちゆうしながら、スプリングコートスプリングコートの広告戦略を立て、サマーウェアのデザインに修正をかけながら、来シーズンらいしじゆんの冬物はどんなラインで攻めようかと考えていた。ヘッドハンティングの業界のことなど何も知らなかったし、自分がヘッドハンターになるなどとは考えてもいなかった。

この半年、自分が動いて成立したヘッドハンティングの案件は数えるほどしかないが、そもそもこの仕事は、数カ月でものにできるような話は少ない。ただ、手持ちの中には、話が進んでいる案件もいくつかあり、仕込み段階とも言えるそれらは、来年に向けての楽しみでもある。そういった意味では、まずまず順調な一年目だと考えてよかった。

「一応、みなさんの空いてる日が十九日なんで、そこでどうかと思ってるんですけど」

スケジュールを確認すると、特に問題はなさそうだった。

「私は大丈夫だけど、みんなってことは、井納いのうさんも大丈夫なの？」

「それが大丈夫なんですよ」碧衣が言う。「私もメール見て、えっと思ってたんですけど」

リサーチャーの井納尚人いのう なおとは、頼んだ仕事はきっちりこなしてくれるのだが、極度きょくどの人見知りらしく、直接的なコミュニケーションはまったく通じない。話しかけても平気で無視するのだ。

だから、仕事の話などはメールでやり取りする。碧衣なども同じスタッフルームにいて向かいに座っているのに、忘年会の出欠をメールで確認しているわけだ。

そんな井納だけに、どんな顔をして忘年会に出席するのか、まったく想像できない。

「意外とお酒が好きなのかもですね」

そうかもしれない。

「じゃあ、彼にはいろいろ助けてもらったし、お酌しやくの一つでもしとこうかな」

「鹿子さんにお酌されたら、たぶん喜びますよ」碧衣がいたずらっぽく言う。「まあ、顔には出さないかもしれないですけど」

小穂はファームの先輩である渡会花緒里わたらいかおの引き合いで、彼女のいる。エグゼクティブ層の人脈づくりが目的ののだが、おかげで人の酒を作ったり注ついだりということは、慣れたものになった。そうしたもてなしの所作しよさは、依頼者や候補者との会食でも生かされていて、今では小穂の武器の一つになっていると言ってもよかった。

「左右田そうださんや細川ほそかわさんも来るんだよね？」

「もちろんです」

小穂がこのファームに入ってから、メンバーがそろって食事をす

るような機会は一度もなかった。総勢で八人しかないのだが、ヘッドハンティングは基本的に個人プレーの仕事なので、団結力などは要求されないのだ。

秘書の碧衣や所美南とはよく話すし、仲もいいのだが、小穂と同じコンサルタントの左右田とは挨拶くらいしか交わさないので、いまだにどんな人物なのかよく分かっていない。井納と同じリサーチヤーの細川瑞季みずきにいたっては、妙な敵意を感じるほど距離を置かれていて、小穂は彼女に仕事を手伝ってもらったことがない。

それでも、この小所帯でのビジネスが無理なく回っているのだから、それで構わないのだが、そういうメンバーが集まる場がどんなものになるのかは、やはり想像がつかなかった。

「えー、どんな感じなんだろ」

小穂はそう口にするると、碧衣は、「楽しみですね」と笑った。

「おい、鹿子」

そう呼ばれて、小穂はぎよつとしながらビールを注ぐ手を止めた。

最初は空耳かと思った。

銀座の居酒屋で忘年会が始まって一時間。見ると、向かいの井納の目が据すわっていた。

「この際、お前に言っておきたいことがある」

「え？」

戸惑っている小穂に構わず、彼は滔々と続けた。

「今日しか言わないから、よく聞いておけ。半分はねぎらいだ。実際、入って半年、お前はよくやってる。この前の「スポマート」、俺は正直、山室は口説けないと思ってた。けれど、お前はあっさりそれをやってみせた。それについては手放しで褒めてやろう。大したものだ。

だが、同時にこうも言っておく。ちよつといい結果が出たからって、調子に乗るな。今年の成果はすべて運だ。来年、必ず苦勞する。勢いだけじゃこの仕事は続かない。壁にぶち当たったとき、お前の真価が初めて問われる。大事なものは、汗をかくことだ。楽をしようと思うな。結果が出なくなるとき、陥りやすいのは、自分が楽をできる道を選ぶことだ。簡単に口説ける人間で間に合わせようとすることだ。だがな、その道を選んだとたん、お前の成長は止まる。この程度の仕事でいいと妥協した瞬間、それがお前の限界になるんだ……」

「鹿子ちゃん、何か変なの飲ませた？」

掘りごたつ式の座敷の中ほどに座っている花緒里が、心配するような声をかけてきた。

「ただのビールですよ」

小穂は手にしたビール瓶びんを振ってみせる。

「おい鹿子、ちゃんと俺の話はなしを聞け」

井納に据わった目で一喝いっかつされ、小穂は「聞いてます、聞いてます」と首をすくめた。

「お前のことを見込んで、言ってるんだ」

「ありがとうございます」

「俺はヘッドハンターたぐの道はあきらめた。その代わり、その夢をお前に託す。お前の十年計画を言う。まずは三年間、がむしゃらに働け。失敗してもいい。前向きな失敗なら俺が許そう。同時に英語を勉強して、ウォートンでMBAを取ってこい。これで最初の五年。

次の五年はとにかく結果を出せ。十年目に渡会花緒里を抜け」

「いやいやいや、そんな軽く言わないでくださいよ」

「お前の駄目だめなところは欲のないところだ。周りの空気に流されるところだ。もつと執着しゅうちやくしんを持って仕事をしろ。高い目標を持って臨まなきや、お前は必ず来年、壁にぶち当たる。今年はビギナーズラックだと思え。それでその先もやれると思ったら大間違いだ……」

初めて井納の声を聞いたと思ったら、そこから一時間近く、説教を聞かされる羽目はめになった。十年計画の話が五回目になって、いい加減泣きそうになっていると、座敷の奥で並木なみきと話していた細川瑞季が、いきなりどんと、こぶしをテーブルに打ち下ろした。

「いったい、いつまで我慢すればいいんですか!？」

ぎょっとして、周りの話し声が一斉にやんだ。井納だけが、「仕事だけじゃ駄目だ。同時に英語も勉強して、ウォートンに行け。MBAを取ってこい」と話し続けている。

「いや、だから、ちゃんと考えてるよ」並木がなだめるように言う。

「だけど、まだヘッドハンターをやるには若すぎるしなあ」

「若いって、私は鹿子さんと同じ年ですよ。どうして彼女はよくて、私は駄目なんですか？」

「いや、まあ、そうなんだけど……」

瑞季の剣幕に、並木もたじたじである。

彼女が小穂に対して友好的な感情を持っていないことは何となく感じていたが、ヘッドハンター志望だと知って、その意味が腑に落ちた気がした。

「渡会花緒里の年俸は推定八千万。お前はこれを十年で抜け」

「人の稼ぎを勝手に推定するな!」という花緒里の声と、「もういい加減、黙って!」という小穂の声が重なり、ようやく井納の声が途切れた……と思ったら、呟き声に変わった。下を向いて、ぶつぶつ喋り続けている。

「でも、瑞季ちゃんがコンサルになると、リサーチャーが足りなくなるしな……」

並木は目を泳がせながら、そんなことを言っている。

「私、やってもいいですけど」

美南が名乗りを上げ、並木は「あ、そう」とありがた迷惑そうに
応じた。

「まあ、俺はいいと思うんだけど……花緒里さんはどう思う？」

「私に訊かないでよ」面倒事を嫌うように、花緒里があっさりはね
つけた。

「いやいや、君も共同経営者なんだからさ」

「そういうのは全部、並木さんが決めてきたじゃない」

「それは花緒里さんの負担を減らそうと思ってることで」

「じゃあ、そのまま減らし続けて」

「左右田くんはどう思う？」

「雇われの僕に訊かないでくださいよ」

スマホをいじりながら酒を飲んでいた左右田は、顔も上げずにす
げなく答えた。

薄々気づいていたことではあったが、みんな、気の強い瑞季が苦
手なのだなと思った。左右田がリサーチの仕事を頼むときでも、曖
昧な指示を「だから、具体的にどういうことですか？」などと彼女
に突っこまれ、「いいよ、自分でやるから」と、逃げるように引っこ
めているのを見たことがある。

「人に話を投げてごまかさないてください」瑞季が尖った声とがで並木を責め立てる。

「そんな、ヘッドハンターなんて甘いものじゃないんだよ。食うか食われるかの世界なんだよ……」

小穂の前では、井納がテーブルの皿を見つめながら、相変わらず小声で喋り続けている。

基本的にリサーチャーは、一日中オフィスに閉じこもって、調べ物をするのがほとんどの仕事である。その分、ストレスが溜まりやすいのかもしれない。

「ごまかしてるわけじゃないよ。こういうことは慎重に考えないと……」並木はさらに目を泳がせ、なぜか小穂を見た。「鹿子ちゃんはどう思う？」

「えっ？」

自分に振られるとは思っておらず、小穂はうろたえた。

瑞季が横目で鋭い視線を向けてきた。

「い、いいんじゃないですかね……」

小穂は彼女の視線の圧あつから逃れるように、そう言った。

「だからお前は甘いって言ってるんだよ……」

井納がぶつぶつと呟いている。

神田川と不忍池の間に位置する湯島は、本郷台地と呼ばれる高台にあり、自然、坂が多い町である。その一つ、三組坂を上ったところに「二見鞆」の社屋がある。

「二見鞆」の社長・二見邦久は、お茶の水の大学病院から退院したこの日、誰もいない根津の自宅マンションで小一時間ほど一服したのち、スーツに着替え、タクシーで会社に向かった。

少し前まで、春や秋のすぐしやすい時季には、健康のために、自宅から会社まで歩いて通ったことも多かった。しかし、闘病中の今は、自宅からどこるか、駅からの坂道を一気に上り切る自信もなかった。ベッドに伏せている時間が長かったから、気持ち悪いほど足に力が入らない。杖を買おうかどうしようかと迷う。おしやれなものがすぐに見つかればいいが、今は探すだけでも疲れそうだ。

タクシーを下り、寒空に首をすくめて、マフラーの襟もとに手を当てる。段差につまずかないよう気をつけながら歩き、本社の観音開きのドアをくぐった。

エレベーターに乗り、二階の事務所を覗くと、机に向かっていた何人かの顔がはっと上がった。

「退院、おめでとうございます」奥にいた専務の定村さだむらが立ち上がり、破顔はがんしながら近づいてくる。「お疲れでしょう。座って休んでください」

「おめでどうも何も」彼に手伝ってもらってコートを脱ぎながら、二見は言った。「正月くらい家でゆっくりさせてくれって言って、無理やり出てきたんだ」

マフラーも革の手袋も外したが、ハンチング帽はかぶったままでいた。家族も同然の社員たちを前に格好かっこうつけることもないのだが、抗がん剤治療で髪がまばらになっている頭をわざわざ見せつけるのもどうかという気がした。工房で余っていたホースレザーで自作した帽子だから、好んでかぶっていてもおかしくはないだろう。

事務所の片隅にあるソファにゆっくりと腰を下ろす。無意識にふうと、息が洩もれた。着たときにも腰周りのだぶつきはすぐに分かったが、こうして見ても、スラックスの膝周りひざがだぶついているなど思う。もともと細身の身体からだではあったが、そこからさらに七キロほど痩やせてしまった。仕立したてて屋に直してもらいに行かなければと思っ

た。「やはり、ここが一番でしょう」定村が二見の意を汲くんだように言う。

「そうだな」二見は言う。「自分の家よりここだ」

この土地には、もともと、二見の自宅と工房があった。そういう意味でも、ここが自分の帰るべき場所であるような気がした。

二見が高校を出てから老舗しほせのかばん屋で十五年修業し、独立してここに工房を構えたのが四十五年前だ。

それから十年近くは、他社メーカーの下請したうけとして、革のかばんばかりを作っていた。

職人が育った頃、自社ブランド「エフティーエムftm」を作って、オリジナルデザインの紳士用かばんを売り出すことにした。思い切ってビルを建て、従業員を増やした。

職人仕事による使い勝手のよさ、耐久性の確かさは、二見の工房が作るかばんの売りだった。二見はそこに、軽やかで粋いきなデザイン性を加えたかった。

スーツや革靴はあつらえしか身に着けず、小物も自作するか高級専門店を選び抜いたものを長く使う主義の二見は、かばんも物を持ち運ぶ実用品でありながら、自身の個性を色濃く反映する趣味品だと思っている。ビジネスバッグであれば、それを手にしているだけで持ち主の品格がそこはかとなく上がるのが、いいかばんである。

職人のセンスによって、ある程度まとまったデザインのかばんを作ることは難しくないのだが、そこに華やかさや気品をこめるとなると簡単ではない。そこで二見は、美大出のデザイナーの卵を何人

か雇い、職人仕事を見せながら、かばんデザイナーとして育てていった。

即戦力ではなく、何色にも染まっていない才能を起用したのが正解だった。最初は彼らの青いとも言えるセンスが空回りし、耐久性や使い勝手に難のあるサンプルしか出来上がらなかったが、二見はそれでも、どんどん面白いデザインを上げてこいと彼らに言った。

職人衆には、何とか彼らのデザインを実物に落としこむよう努力させ、出来上がったサンプルを前にして、どこにどんな欠点があるのか、両者にとことん意見を言わせた。

そうやってデザイナーと職人が互いにセンスと技術を磨き合い、うまく噛み合った先に、二見が求めるかばんがあった。ダンディズムにあふれる黒革のブリーフケースは、バブル時代のヤングエグゼクティブと言われた層に受け入れられ、「f t m」のブランドを百貨店のかばん売り場の一角になくてはならないものにした。

それから三十余年、ビジネスバッグは革製のものから、ナイロンなどの化学繊維素材を加工したものへと主流が移っている。「二見鞆」でも、収益を支えている主力商品は、特殊加工のナイロン素材に、部分的に革を組み合わせて高級感を出しているラインだ。それらは外注に任せ、社内の工房は丸の内の直営店などで扱う総革物に特化している。

それができるのも、内外のいろんな職人と付き合い、彼らを立てながら理想のかばんを具現化する企画力を持った、社内デザイナーたちの存在があるからである。かつての若手は管理職へと育ち、今は彼らの子どものような歳のデザイナーが、若手として独り立ちの過程にある。

売れ筋が変化し、外注が増えたこともあるが、社員数はこの三十年、それほど変わっていない。三十年前は三十一人。今は三十七人。直営店の運営のために増やした人数を除くと、ほとんど同じだと言ってもいい。

売上も伸びているし、収益力も上がっている。しかし、こうした頭打ちの社員数を見て、停滞している会社だと見る向きもあるだろう。

会社を大きくする選択肢せんたくしもある中で、二見はそうしてこなかった。人は器以上には育たないものである。そして会社もまた、経営者の器以上にはならない。

二見は小さなビルをここに構えたとき、会社の成長の見通しを立てながら財布と相談して、四階建てのこの大きさにしたわけだが、何となく無意識に、それが自分の力で経営できる規模の限界だろうと捉とらえていた気がする。

もともとは職人としてこの世界に入った人間だ。社長を務めてか

らも、職人たちに交じって革を縫ぬっているときが、一番働いている実感があつた。売上の数字が上がったときよりも、自分の作ったかばんが百貨店の展示ラックに、工芸品の輝きを持って置かれているのを見たときのほうが誇らしい気持ちになる。

経営者としてはそこそこだった……二見は自身を評価して、そう思う。軌道に乗ってからは無借金でやってこられたのは幸いだった。身の程をわきまえて、変に会社を大きくしなかったのが逆によかったのかもしれない。

ただ、自分がやはり根っからの経営者だと思えないのは、デザイナーや職人の世界の人材は、次代を担う若手まで含めて順調に育てられているのに対し、経営を担う人間は育てられなかったからでもある。

「いやあ、本来なら加療かりように専念してもらわなければならないところ、入院中はお騒がせいたしました」

向かいに座った定村が、そう言つて、申し訳なさそうに頭を下げた。

「まあ、いろいろあつても、とりあえず年を越せる。それで十分だ」入院中、取引先との交渉でちよつとした案件が持ち上がった。

「二見鞆」は小売の相手として、百貨店や老舗の専門店のほか、大手セレクトショップとも取引をしている。

付き合いのあるセレクトショップは二社あり、中でも「フアビュラス」は、「f t m」の扱いには熱心で、毎年、コラボレーション企画の商品も開発している関係だ。

社長の中西勇作は、まだ五十代半ばで快活な男である。二見と会うと、「社長は相変わらずおしゃれですねえ」と身だしなみから持ち物から、何でも褒めまくる。それなりの目利きでもあるから、二見は一つ一つ、どこでどうあつらえたかとか、どこが気に入って買ったかとか、そういうことを披露し、彼はまたそれに感心してくれる。そういうやり取りは楽しくもあり、また、「f t m」の商品そのものも高く評価してくれているので、仕事相手としては大切な存在だと言える。

その「フアビュラス」が二見の入院中、ある提案をしてきた。「フアビュラス」はほかのセレクトショップと比べても高価格帯の商品に力を入れているが、今後はそのカラーをさらに鮮明にして、ハイクラスの顧客層に訴えていきたいと思っている。その差別化戦略の一環として、ついでには「f t m」のセレクトショップでの販売チャネルを「フアビュラス」に一本化してもらえないだろうか……というものだ。

マージンも「二見鞆」に有利なように見直し、よそから手を引いた分をカバーすべく、売り場スペースも広げる……必ず損はさせな

いと、中西自ら、定村に談判だんぱんしたらしい。

定村から報告を受けたとき、二見は、面白い話であるが、難しい話だと思った。

セレクトショップに卸おろしている商品の売上で、「フアビュラス」は六割強を占めている。ただ、販売店数で言えば、割合は逆転する。

少ない店舗でそれだけの売上があるのは、「フアビュラス」がいか
に「二見鞆」の販売に力を入れているかの表れでもある。十万円台
のブライドルレザーのかばんは、百貨店でもぼつぼつとしか出ない
が、「フアビュラス」はコンスタントに売ってくれる。

とはいえ、「フアビュラス」一社に絞しぼって、果たしてもう一社の
撤退分をカバーできるかという点、計算は立たない。長い歳月にわ
たる営業努力で増えた販売網が三十店舗以上減るのは、経営者とし
ては恐怖に近い感覚で捉えざるをえない。

ただ、中西の勢いや勝負勘には乗ってみたい思いもある。魂をこ
めて作った商品は、それなりの情熱を懸けて売ってくれるところに
任せたいとも思う。

二見が心身ともに元気であれば、中西の意気に応えたかもしれない。
しかし、病魔に襲われた身では、話が違ってくる。結果がいい
方向に転ばなかったとき、「おたおたするなよ。どんといこう」と社
員に言って収めるべき自分が、健在とは限らないのだ。

だから、二見は治療による体調不良を言い訳にして、定村に決断させてみることにした。

しかし、定村はあれこれ理由をつけながら毎日のように二見の病室を訪れ、二見の意向を必死に忖度そんたくしようとするだけだった。彼自身では何の決断も下せなかった。

「今回は丁重ていちょうに断つとくか……？」

二見が仕方なくそう口にするのと、定村は、「それがいいと思います」と安堵あんどするように洩あらしたものだ。

「ファビュラス」側にとつては、失望すべき返事だったのは間違いない。その証拠に、向こうからは、来年のコラボレーション企画を棚上げする旨むねの連絡が早速来たという。「f t m」に力を入れる現行方針にも見直しがあるかもしれない。

そのこと自体は、仕方がないと割り切るしかない。

今、考えなければならぬのは、この会社の中の問題だ。

自分の後継問題。

社員の誰にも打ち明けていないが、病状から考えれば、それは差し迫ったものだと言ってもいい。あと五年くらいは元気に働けるかと思っていたが、そういうわけにはいかなそうだ。

いざとなれば定村に託すしかないかと思っていた。しかし、いろいろあって考えてみると、それも安易というか、創業者の遺志とし

ては少々無責任のような気もしてきた。

定村も、もう七十二歳だ。もともと職人としてやっていたのを、リウマチで手先が言うことを聞かなくなり、事務方に回した経緯がある。気質には職人独特の頑固がんこさはなく、一見にも忠実だったので、右腕としては重宝ちようほうしたのだが、経営センスを買って取り立てたわけでもない。年齢的にも、これから何年も無理ができるわけではない。とはいえ、その下に人材が控えているわけでもないのだ。

書類に囲まれた社長室に入り、当座の決裁を済ませたあと、二見は定村を呼んだ。

「定さん」二見は腕を組んで彼を見た。「これからのこの会社、任せるとしたら、あんた、誰がいいと思う？」

そう訊くと、定村は笑みを引きつらせた。

「そんな……まだまだ社長にがんばっていただかないと」

「いくらそのつもりでいても、気持ちだけじゃどうにもならないときが来る」二見は言う。「これから十年、二十年のことも考えなきゃいけない責任が、俺にはある」

定村はこくりと、ぎこちなくうなずいた。

「難しいですね」

彼は、自分ではその任は務まらないと悟っているように洩らした。

「瀬川は難しいかな」

「瀬川ですか……取締役も嫌がってたくらいですからね」

製作部長の瀬川章夫は五十五歳で、仕事ぶりには脂が乗っている。ただ、根っからの職人であり、社外的な交渉事にはまるで向かない。

一応、取締役ではあるが、散々渋るのを、何もしなくていいからと丸めこむようにして就かせたものだ。

「だったら、原田か」

「彼もどうでしょうね……」

企画部長の原田丈博も取締役に名を連ねている。美大出身の天才的工業デザイナーであり、彼のセンスによって「二見鞆」の商品は磨かれてきたと言ってもいい。まだ五十代後半で、若さもある。

しかし、彼もまた芸術家肌のところがあり、気分屋である。興味のないことには、徹底して動こうとしない。

つまり、「二見鞆」の現場のトップに立っている二人は、かばんのデザインや製作をする仕事においては有能であり、それぞれの立場での話ができるのだが、会社全体を考えるような問題にはタッチしようとならないのだ。それはすべて、二見の仕事だった。

これがスタッフ十人に満たないような工房であれば、瀬川や原田のようなトップでも、問題はないだろう。けれど、三十人以上いて、年商も十数億に達する規模だと、現場のトップがそのまま会社のト

ップであるという考えでは通用しない。経営をしなければいけないのだ。

「とりあえず、瀬川と原田を呼んでくれ」

本人たちはその気があれば、まだ何とかなるかもしれない……二見は二人の意思を確かめてみることにした。

「退院、おめでとうございます」

社長室に顔を見せた二人は、口々にそんな挨拶を二見に向けた。

原田はデザイン画の束たばを手てにしていた。

「3WAYのビジネスバッグです。早くお見せしたいと思ってたんですよ」

それが退院祝いであるかのように、彼は新作の構想を披露ひろうしてくれた。

「ほう、ずいぶん丸っこいな。ダレスバッグか」

「そうです。ここのところ、薄さを追求したバッグが多かったんで、こういうのも面白いんじゃないかと思いましたが。スーツで背負っても、子どももつぽくない。こういうイメージですね」

「なるほど、様さまになるな」

スタイリッシュなバッグの絵にしばらく惹ひきこまれてから、二見は顔を上げた。

「ありがとう。いいもん見せてもらった」二見は言い、一呼吸置いてから続けた。「ところで、一つ、あんたらの考えを聞かせてほしいことがある」

原田がわずかに眉をひそめた。隣に立っている瀬川も、無言のまま、構えるような面持ちになった。

「会社のことだ。俺がこの先まだ何年も引つ張っていければいいが、どうなるか分からん。退院したてで気が弱くなってるわけじゃない。現実の問題として考えなきゃいけない。定村もそれなりの歳だし、先のことを考えれば、その下の世代にバトンタッチするべきだと俺は思ってる」

二人の表情がどんどん硬くなっていく。

「普通に考えて、今のうちで、その役目を任せられるのは、君たちのどちらかだ」

「私はデザインのことしか知らない人間です」原田は迷惑そうに言った。

「そうだろうよ」二見は言う。「それは俺も分かっている。あんたをデザイン部門のトップに置いておくのが、この会社にとっては一番いいということも承知だ。でも、ほかに誰がいる？」

「瀬川くんがいいですよ」

「私もかばん作りしかできない人間です」

案あんの定じょう、二人とも譲り合い始めたので、二見はげんなりした。

「今は経営の知識も経験も何もなくても、それはやっていくうちに何とかなっていくと思う。大事なのは、やる気と覚悟だ」

「デザイナーが経営のトップに立って、うまくいくとは思えません。いろんなファッションブランドなんかを見ても、経営は経営の専門家がやりますよ」原田が言う。

「俺だって、経営の専門家でも何でもない。ただの職人だったんだ」

「社長は経営者の資質があつたんです。だから、この会社は生き残つてこられた。私はデザインの仕事でなら、今後も会社に貢献していける自信はありますが、そのほかでは何の自信もありません。無責任には引き受けられません」

頑かたくな姿勢はるひさに閉口へいこうし、二見はやれやれと、定村と顔を見合わせた。

「晴久はるひさくんは駄目はるひさなんですか？」

瀬川が唐突に、二見の息子の名前を口にした。

「そうですよ」原田もうなずいた。「[f t m]のブランドを守っていくには、正直、創業家で経営を担っていくのが一番だと思いますよ」

「うーん……」

それができたら苦勞はしない。二見は低くうなるしかなかった。

「今年もよろしく願います」

年が明け、正月気分も束の間、仕事始めの日がやってきた。

スタッフルームに顔を出し、秘書の碧衣や美南に挨拶したついでに、井納にも声をかけてみたのだが、見事に無視された。

カタカタカタと、キーボードをたたいている。

この男、忘年会では小穂に散々説教しまくったくせに、あくる日からは、何もなかったかのように、この調子である。

「細川さん、今年もよろしく願います」

瑞季にも声をかけてみると、視線こそこちらに向かないものの、

「よろしく願います」という返事が来た。

お、何だか機嫌がよさそうだな……小穂はそう思う。

「みなさん、明けましておめでとうございます」

並木が現れ、朗々とした声で新年の挨拶を口にした。

「今日から、瑞季ちゃんにはコンサルタント職をやってもらうことになったんで、一つみなさん、ご協力願います」

「へえ……おめでとうございます」

言いながら瑞季を見ると、彼女は誇らしげな笑みを浮かべていた。

応接室として使っていた部屋を早急に模様替えして瑞季の執務室にするらしい。ファームを訪れる来客など、めったにいないし、ほかにミーティングルームもあるので、応接室がなくなったからといって困ることはない。

「瑞季ちゃんがやってた仕事は、美南ちゃんに引き継いでもらうから」

美南が新たにリサーチチャーターとなり、秘書はとりあえずのところ、碧衣一人になるようだった。

「一ついいですか」

よく見ると、早くも机の中の整理をしている様子の瑞季が口を開いた。

「これからコンサルとしてやっていくこともありますし、そろそろ、ちゃん付けの呼び名はやめていただきたいと思います。『細川』でも何でもいいです。もう歳も歳ですし、それなりの呼び方をしてください」

何か決意表明でも口にするのかと思いきや、出てきたのは、そんな話だった。

「あ、そうね……じゃあ、細川さんで」

並木も顔を引きつらせ、たじたじになっている。

相変わらずだな……小穂は内心で苦笑する。

「鹿子ちゃんは、そのままでもいいよね？」

自分の部屋に向かおうとする小穂を追って、並木はそんなことを確かめてきた。

「並木さんは、ああいうタイプには本当、弱いですよねえ」

この日は、「クラブ紗也加」の出勤日も重なっていて、花緒里の客と同伴の約束があった。それに間に合わせるべく、ファームの仕事は六時前に切り上げ、小穂は美南と一緒に、銀座のヘアメイクサロンに寄った。

「渡会さんなんか、『あんな^が私の強い子にできるのかなあ』なんて、言ってますけどねえ」

並んで、髪をセットしてもらいながら、美南が昼は決して洩らさない本音を口にする。

「でも、美南ちゃんは、リサーチャーやってみたかったですよ？」

「私はどっちでもいいんですけど、鹿子さんなんか、食い合いになりますよ」

「食い合いって……」小穂は苦笑する。

「つぶしとけばいいものを……『いいんじゃないですか』って、賛成しちゃうから」

「そんなこと言ったって、ほかに言いようがないでしょ」小穂は小

さく肩をすくめる。「まあ、サーチ業界はまだまだパイが広がって
くと思うし、私や細川さんのような世代のプレイヤーが増えていく
のは、いいことなんじゃないのかな」

「ほう……人間ができてますね」

からかわれるように言われた。

夜の仕事始めとあつて、小穂も髪をセットアップしたのだが、花
緒里は新日本髪に黒留袖とめそでを着付け、貫禄かんろくの装いで同伴の待ち合わせ
に現れた。

「本当、ヘッドハンターがホステスやってるのか、ホステスがヘッ
ドハンターやってるのか、自分でも分かんなくなるわ」

夕方早々、ファームの仕事を切り上げ、着付けと髪のセットに時
間を割きいた彼女は、自嘲じちよう気味に言つて笑つていた。

同伴客は、花緒里が二十代の頃に在籍していた大手化粧品会社「ラ
ケシス」の三浦みうら会長と荒井あらい常務だった。会長は花緒里がいた頃、社
長を務めており、常務は花緒里の上司である営業本部長だったらし
い。

花緒里がエリアマネージャーとして担当していた銀座地区は、当
時、売上で新宿地区や大阪地区を抜いて日本一となり、花緒里は何
度も社長賞をもらっていたそうだ。

天ぷら屋のカウンターで新年を祝う乾杯をし、菜の花や椎茸などの山の幸から、キスや車海老などの海の幸まで、揚げたてのほくほくした天ぷらをご馳走になった。

「まったく、こいつは、うちの金を使ってウォートン行ったつのに、MBA取ったら、さっさと辞めちまいやがって」

「だって、戻ってきたら居場所がなくて、希望もしてない商品管理に行けって言うのよ」

「馬鹿だなあ、商品管理や財務を経験するのは、うちの出世コースなんだよ。将来的には役員の器だと見られてる人間が送られるんだぞ」

「そんなこと知りませんよ。私は外に出て人に会ってないと、ストレスで死んじゃうの。だから、仕方なく辞めたんですよ」

「まあでも、花緒里ちゃんはずちを辞めて正解だったんじゃないか。名うてのヘッドハンターとして、こうやって成功してるわけだしな」

「おかげさまで。会長も何か人材探しの用事があつたら、遠慮なく言いつけてくださいね。常務の代わりくらいなら、ちよちよいのちよいで探してきますから」

「ちよちよいのちよいとは何だ、ふざけんな」

かつての上司相手の、花緒里の遠慮ないやり取りに笑い、あつという間に八時をすぎて、店に向かう時間となった。

夜の銀座には、黒留袖や色留袖を着たホステスが同伴客と歩く姿が目についた。その艶やかな姿に目をやりながら、街を歩き、「クラブ紗也加」のあるビルへと入る。

エレベーターに乗って店のフロアで降りたところ、店のドアの前に一人の老人が中をうかがうようにして立っていた。小穂たちの集団に気づいて、脇にどいた。

「ごめんなさいね。うちは会員制で、どなたかの紹介がないと、お通しできないんですよ」

見慣れない顔に、花緒里がやんわりと声をかける。

八十近いだろうか。頬がこけ、青白い顔をした男だった。ただ、革のハンチング帽をかぶり、カシミアと思われる上質そうなコートに身を包んで、シックなマフラーを巻いている。革の小さなトートバッグも趣味がよく、おしゃれな人だなと思った。銀座の空気に馴染んでいて、クラブにも通い慣れている雰囲気がある。

「このへんに「亜津子」って店があつたはずなんだが……」

男は「クラブ紗也加」のドアを見やりながら、誰に言うでもなく、しわがれた声でそう洩らした。

「あ、「亜津子」はなくなったんですよ」花緒里が応えた。「七年くらい前に。うちのママ、「亜津子」で働いてたんで、「亜津子」のお客様だったんなら、お通しできますよ」

小穂も「クラブ紗也加」で働き始めて四カ月ほどになるので、店の成り立ちなども紗也加や花緒里らから聞いている。

ここはかつて、「クラブ亜津子」という名のクラブがあり、亜津子ママが三十年ほど店を切り盛りしていた。紗也加はその店で、最後のほうはチーママを務めていたらしい。

亜津子ママが引退することになり、紗也加が継ぐことで話がついたが、自分の名前を冠した店名は自分の代限りにしたいという亜津子の希望により、「クラブ亜津子」はその時点で幕を閉じることにした。一応、常連客には知らせを送ったらしいが、亜津子も病気を抱えての引退だったので、報告が行き届かなかった面もあったようだ。今でも「クラブ亜津子」を訪ねてくる客や、問い合わせがちらほらとあり、「クラブ亜津子」に通っていたという客は、紗也加の係であるなしにかかわらず、今の店にも通していることになっている。

「そうか……なくなったのか」

男は寂しそうに呟いた。店に入るよう促す花緒里の視線に小さく首を振り、「違う店なら、入ってもしょうがない」と応えた。

「せっかくだらしたんですから、そんなこと言わずに、入ってくださいよ」

花緒里が軽い口調でそう言うのにも、微笑笑で受け流し、男は帰ろうとする。しかし、ふと小穂と目が合ったところで、彼の歩みは

止まった。

「やっぱり、飲んでくか……」

え……小穂が戸惑っているのをよそに、花緒里が「どうぞ、どうぞ」と男を店に招き入れた。

ドレスに着替えてフロアに出ていくと、三浦会長の席にいた花緒里が、小穂のもとに寄ってきた。

「こっちはいいから、鹿子ちゃん、さっきのお客さんの席に付いて」
彼女はいたずらっぽく言った。「ご指名だから」

よく分からないが、どうやら一目で気に入られてしまったらしい。
ハンチング帽の男の席では、紗也加が向かいのストールに座って接客していた。小穂は男に挨拶し、隣に座った。

「かのこちゃん、こちらね、「二見鞆」の社長さん」

「へえ」

とはいえ、小穂は「二見鞆」という会社を知らなかった。

「うちは紳士向けがほとんどだから、「二見鞆」だなんて言われても、
分かんないだろうよ」

社長はそう言って、朗らかに笑っている。

社長から名刺をもらい、小穂は店の名刺を渡した。

「二見鞆」社長・二見邦久。ブランド名だろうか、「ftm」という

ロゴも記されている。

「でも、紳士かばんの世界では老舗なんですよね」

探り気味に訊いてみる。

「いやいや、うちはまだ四十五年だよ。俺が起こした会社だから」

「まだって、四十五年もやってたら、十分老舗じゃないですか」

「馬鹿言っちゃいけないよ。かばん屋なんて、二代三代、百年以上
続いているところだって、いくらでもあるんだから、うちなんてひよ
つこだよ」

「ずいぶん年季の入ったひよっこですね」小穂は笑う。

小穂も下ろしたてのウイスキーをもらい、二見と乾杯した。

「おしゃれな社長さんでしょ」紗也加が言う。「十年くらい前にお見
かけして以来なんだけど、昔からおしゃれな人でね、変わらないわ」

「いやあ、もう、しよぼくれちゃって駄目だ」二見が言う。「ずっと
入院しててね、痩せちまって、服も合わなくなつたから、この近く
のテーラーに持ってきたんだよ。それでまあ、正月っぽいこともし
てなかったし、久しぶりに華やかな場所でも覗いてみようかって気
になつてね」

どうりで青白い顔をしている。

「まあ、じゃあ、今日は新年会に快気祝いですね」

紗也加が調子よく言うのに、二見は首を振った。

「快気なんてしてないよ。シューカツだよ、シューカツ」

「シューカツ？」紗也加が首を捻る。

「シューカツって言っても、就職活動じゃないよ。ご臨終りんじゆうのほうの終活だ。次、入院するのはもう、この世とお別れするときだから、それまで好きにやるしかないってことだよ」

「何言ってるんですか。寂しいこと言わないでくださいよ」紗也加は苦笑いを引きつらせて戸惑ったように言い、「そうそう」と強引に話を変えた。「さっきちょっと聞いたんだけど、かのこちゃんは、二見社長がその昔、「亜津子」によく通ってた頃に気に入ってた女の子に、ちよつと似てるんですって」

「えー、そうなんですかあ」

小穂も湿りしゅそうになった空気を吹き飛ばすように、明るい声を出した。

「三十年以上前の、私も知らない時代の話だって」

「私、よく昭和顔って言われるんですよ」

小穂がおどけるように言うと、ようやく二見の顔にも笑みが戻った。

「明美あけみっていう名でね、いい子だったな……」二見は当時を思い出すように、しみじみと言った。

「社長さん、おモチになったでしょう」

小穂がそんなふうにな水を向けると、二見は微苦笑を浮かべた。

「まあ、仕事も順調だったし、調子に乗ってたんだろな。男子たるもの、よく働き、よく遊ぶべしなんて思ってたわけだ。それで女子どもに逃げられちゃったんだから、ざまあないよ」

「ははは、駄目じゃないですか」

湿っぽくならないよう、二見の肩をたたいて笑い飛ばしておいた。

「本当だよな。自分が悪いんだから、どうしようもないよ。息子なんて、いまだに電話しても、けんもほろろだ。おつかあが亡くなくても、教えてさえくれなかった」

さすがに笑い飛ばせなくなった。

「ちよつと失礼しますね。ごゆつくり」

紗也加は逃げ出すようにして、席から離れていってしまった。

「な、長い人生、いろいろありますよね」

小穂は苦しまぎれに、そんな言葉を口にしてみる。

「まあ、終わってみたら、あつという間だけだな」二見はしみじみと言う。「でも、やり直しはできない……全部自分の責任だよ」

どうも言葉の端々に自分の死期が間近いと悟っているような思いが見え隠れしていて気になる。終活という言葉も、冗談じょうたんで口にしたわけではなさそうだ。

「あ、このバッグもおしゃれですねえ」小穂は二見のかたわらに大

事そうに置かれてある革の小さなトートバッグに目を留め、紗也加
ばりに話を変えた。「これも「二見鞆」さんのですか？」

たんざく
短冊状のレザーを編みこんである、イントレチャートのバッグだ。

「いやあ、これは余った切れ端を使って、遊びで作ったやつで、商
品じゃないよ」

「社長が作られたんですか？　すごい、海外の高級メゾンバッグみ
たい」

「俺だって、もとは職人だよ。ちよつと前までは、時間ができれば
工房に出ってたんだ。今だって、俺と肩並べる腕を持つてるのは、製
作部長くらいだよ」

「じゃあ、ますます、社長には元気でいてもらわないと」

「いや、作るほうは心配ないんだ。若手も育ってるし、デザイナー
たちも、かばん作りについてはよく勉強してる。手を抜くような連
中じゃないから、俺がいなくなっても、いい仕事をしてくれるはず
だ」二見はそう言うてから、かすかに苦そうな顔をした。「ただ、社
長をやるやつがない。職人やデザイナーのトップだからって
って、そいつに経営を押しつけて、うまくいくもんでもないんだ。
退院してから、いや、退院する前からだな……頭ん中はそのことば
かりで、正月気分も何もあったもんじゃないよ」

ヘッドハンティングの世界に身を置いていると、小さな会社の後

継者問題は頻繁ひんぱんに耳にする。

小さな会社は社長が何から何までやってしまうため、後継者が育ちにくい。結局のところ、子どもが跡を継ぐのが最善なのだが、そう単純にはいかないところも多いのだ。

そうした会社からの依頼は「フォルテフロース」にもいくつか舞いこんでいて、ファームのデータベースにも、オフィアの詳細が入っている。

しかし、それらには、コンサルタントのフラグがなかなか立たない。キャンディデイトを見つけたのが難しいからだ。たとえ優良企業でも、年俸一千万以上あっても、社員が十人そこその町工場のようなところで、社長が営業もやり、資金繰りもやり、業界や地域のこまごまとした役も引き受け、ということになると、ヘッドハンターがキャンディデイトとして抱えているプロ経営者の土俵からは少し外れてしまう。一から適任者を探すのは、かなりの難題であり、コンサルタントたちは自然、人材を見つけた時点で着手するというスタンスになるので、担当者不在の案件として放置されがちなのだ。

「会社は何人くらいいるんですか？」

ただ、ヘッドハンターとしては気になる話であり、小穂は、ただのホステスであれば訊かないような質問をついつい口にしていた。

「今は三十七人でやってるよ」

「あ、割と大きいんですね」

工房に毛が生えたような会社を想像していたので、思わずそんな言葉が口をついて出た。

「大きくはないが、誰でも経営できる規模でもない。だから、困ってるんだ」

それくらいの規模の会社であれば、自分の仕事の範囲かもしれない……小穂は思う。

しかし、この話自体、彼の余命が残り少ないということが前提となっているだけに、まともに乗っていいものかどうか、ためらわれる部分があった。

「いやあ、久しぶりの酒はうまいけど、効くなあ」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫」二見は若干じやつかんうつろになった目をして言う。「俺も弱くなつたもんだよ。でも、こうやってちびちびとでも飲んでると、昔に戻つたみたいで悪くない気分だ」

「ふふふ、三十年前に戻つたみたいですか」

「ああ」

それから二見は、水を足したグラスを傾けながら、取りとめもない昔話を続けた。後継者の話は気になったが、その話題に戻るタイミングはなかった。

「かのこさん、お見送りお願いします」

マネージャーに声をかけられ、見ると、「ラケシス」の三浦会長らが帰り支度じたくをしているところだった。食事の礼を言い、花緒里らと見送りを済ませると、紗也加が戻っていた二見の席に再び加わった。

「さて、俺もそろそろ帰るか」

小穂が腰を落ち着けないうちに、二見が言う。まだ一時間ほどしか飲んではいなかったが、無理をさせられる顔色でもないので、引き留めることはしなかった。

「楽しかったよ。やっぱり、銀座はいいな」

二見は酔いと虚脱感の混じった顔をして、ぽつりと言った。

「よかった……またいらしてくださいね」

紗也加の言葉に、彼は自嘲気味の笑みを覗かせる。

「さて……いつまで元気でいられるか」

「困りますよ。いつまでも元気でいてもらわないと」

小穂がそんな言葉をかけると、二見は小さくうなずいた。

「明美にそう言われたら、がんばるしかないな……」

「明美だつて」

紗也加と顔を合わせて笑う。

会計を済ませた二見を、紗也加と二人で見送ることになった。

足もとがふらついているのは、酒のせいか歳のせいか……よく分

からないが、見ているだけで危なっかしい。

「お手洗い、大丈夫ですか？」「忘れ物ありませんか？」「段差、気をつけてくださいよ」

いちいち世話を焼いていると、二見はふつと微苦笑を洩らし、「本当に明美みたいだな」と言った。

何だ、ちゃんと分かっているのか……小穂はおかしくなった。

コートを着せ、エレベーターと一緒に乗り、ビルの外まで見送りに出る。

「社長さん、タクシーですか？」

紗也加は、二見がタクシーで帰ることを確かめると、小穂に、彼をタクシーに乗せるよう命じた。

二十二時をすぎれば乗り場が限られてしまうが、この時間はまだ、適当なところで車を止められる。小穂はタクシーが連な^つって走っている通りまで二見に付いていき、彼に代わって車を止めた。

「ありがとう。世話をかけた」

確かに世話はかかったが、その分、このおしゃれで味のある老社長を、小穂は何だか可愛らしく思えてきていた。

「お気をつけて。また、お待ちしますね」

「ああ……いろいろ落ち着いたら、また来るよ」

その言い方にはどこか、もう来ることはないだろうという本音が

こもっているように聞き取れ、小穂は寂しくなる。

言っておかねばならない……小穂は衝動的に思い、閉まりそうになるタクシーのドアに手をかけていた。

「あの……社長」小穂は車内に首を突っこむようにして、二見に声をかけた。「社長にはまだまだ元気でいてもらいたいですけど……もし、本当に後継者のことで悩んでらっしゃるなら、私、昼間はヘッドハンターやっていますから」

「え……？」

「力になれるかもしれませんが、よかったら、声をかけてください」

別れの挨拶に付け加えられた突然の言葉に、二見も戸惑ったようだった。「ああ」と、曖昧にうなずいただけだった。

ドアが閉まり、走り去るタクシーを見送る。

ぼかんとした二見の表情を思い出し、おかしくなる。かいがいしく酒の相手を務めていただけのホステスが、昼間はヘッドハンターをやっているなどと、別れ際に打ち明けてくるのだから無理もないか。

余計なお世話だったかもしれないが、言わずにやりすごしてしまふよりはよかったのではないか……小穂はそう思いながら、店に戻った。

指名で席に呼ばれたり、同伴でどこ馳走になったりした店の客には、翌日のうちにお礼メールなどを送るようにしている。送り先は、相手の携帯のショートメールやLINEであったり、勤め先のアドレスであったり様々で、差し障りのない送信先を接客のときに確認しておくか、係のホステスに確かめておく。

二見にも、「ラケシス」の三浦会長や荒井常務と一緒に、私用のパソコンから、名刺にあった会社のアドレスにお礼メールを送っていた。

二見にメールを送ったことは、係である紗也加に報告しなければならぬが、どんな内容のメールを送ったかまでは彼女も訊かないので、小穂はそのメールにも、自分の昼間の仕事に関して、ホームページのリンクを張って、一言触れておいた。

もちろん、酒の席でことさら大げさに言ってみせただけの弱音であって、現実にはそういう状況にはないのかもしれない。それを真に受けて、しつこく助力を押し売りするのもよくない。今の自分ができるのは、ここまでだろうと、メールを送った小穂は、そこで気持ちの区切りをつけることにした。

だから、週明け、ファームに出勤して間もなく、携帯に二見から電話がかかってきたときには、驚きのほうが強かった。

「かのこさんかね？」二見の声は、店で相手をしていたときよりしつかりしているように聞こえた。〈先週はありがとう〉

「いえ、こちらこそご馳走様でした」小穂は礼を返した。「久しぶりのお酒で、あのあと、体調は崩されませんでしたか？」

「うん、それは大丈夫だったよ。むしろ、普段より、よく眠れたくらいだね」

「そうですか。それはよかったです」

「メールもありがとう」二見は言う。〈それにしてもびつくりしたよ。別れ際、実は私、ヘッドハンターなんです、なんてことを言うもんだから〉

「ごめんなさい」小穂は笑いながら詫^わびた。「言おうか言うまいか、ずっと迷ってたんです。お酒の席ですし、余計なお節介^{せっかい}で気分を害されることがあってもいけないと思って」

「ふむ……いろいろ気遣ってくれてありがとう」二見はそう言うから続けた。〈ヘッドハンターというのは、私は詳しく知らないんだが、うちみたいな会社の後継社長を探してくるような仕事もやるのかね？〉

「はい、そういう仕事もよく舞いこんできます。後継者問題に悩む企業は増えてますし、一方で今は、企業から企業へと渡り歩く、プロ経営者と呼ばれるような人たちも増えてます。外部からいい人材

を呼んで、あとを託したいと考えられる経営者の方が多くなってるんです」

「うちのような小さな会社でも、来てくれる人はいるんだろうか？」
「正直、五人、十人くらいの零細企業ですと、手を挙げてくれる人を探すのは、なかなか難しいと思います。でも、三十何人という規模で、自社ブランドの商品を作って、安定した収益を上げているというようなことなら、魅力的な会社だと見る人はいっぱいいるでしょうし、その心配は当たらないと思います」

「なるほど……ただ、こちらにも、誰でもいいというわけじゃない」
「もちろんです。条件であるとか、求める人物像を提示していた上で、それに沿って候補者をお探しします」

「そうか……」

二見は相槌を打ち、しばらく考えるような間を置いてから、
「一度、詳しい話をしに来てくれないか」と言った。

やはり二見にとって、後継者探しは切実な悩みだったようだ……
小穂は電話を終えて思った。遠慮しないでヘッドハンターだと明かしてよかった。

こうなった以上は、何とか彼の力になってやりたいと思う。

二見とは、早速午後に会社を訪問して、打ち合わせをする約束を

した。それまで別の案件を進めようと、何本かの電話連絡をこなし
ていると、執務室のドアにノックの音が鳴った。

顔を覗かせたのは並木だった。

「鹿子ちゃんさあ、これから着手するような案件って、何かある？」

「どういう意図での質問なのかは分からなかったが、該当するの
は「二見鞆」くらいである。」

「まだ正式な依頼を受けたわけじゃないんですけど、「二見鞆」って
ところに、今日、打ち合わせに行ってきます」

「おお、「二見鞆」やるんだ」

「知ってるんですか？」

「知ってるよ。「f t m」だろ。今のかばん、だいぶぼろくなってき
たから、最近、物色ぶつしやくしてるんだよ」

やはり、紳士かばんの世界では、それなりの知名度があるようだ。

「ちようどいい」並木が言った。「それでいいよ」

「何がですか？」

「瑞……細川さん、連れてってあげてよ」

「えーっ？」

「ほら、鹿子ちゃんのとくも、俺が「ゼロエトワール」に連れてっ
て、コンサルの仕事を手取り足取り教えただろ」

手取り足取り教えてもらった憶おぼえはないが、確かに小穂の初仕事

は、並木に同行した「ゼロエトワール」の案件であった。

「でも、細川さんは、このファームができたときからいるんですし、わざわざ私が教えるようなことはないと思いますけど」

事実、ファームのデータベースには、手つかずだった依頼案件五、六件に、瑞季のものと思われるHのフラグが立てられている。誰かが教えなくても、勝手にやっていきそうな勢いである。

「いや、中にいると、外のことはなかなか分からないもんなだよ。後輩ヘッドハンターを育てる面倒見のよさを、俺はこのファームの伝統にしたいと思っててね。だから、井納くんが入ったときも俺が外に連れ出したし、鹿子ちゃんもそうだったんだよ」

井納はヘッドハンターとしてファームに入れたものの、まったく使い物にならずに、やむなくリサーチャーに収めたいきさつがあると聞いている。それはともかく、並木がファームのボスとして、新人ヘッドハンターがうまく独り立ちできるように気にかけているのは、嘘ではないと思われる。

「でも、だったら細川さんも、並木さんがやられたら……」

「いやいやいや」並木は小穂の言葉を途中でさえぎるように手を振った。「彼女のネックは若さだからね、同い年の鹿子ちゃんがどうやってるかっことを見せたほうが、得るものが大きいんだよ」

「えー、私、特別なこと、何もしてませんし」

もつともらしいことを言うが、結局は瑞季が苦手なのだろう。おそらくは花緒里や左右田からもやんわり拒まれ、小穂に話を持ってきたのだ。

「大丈夫だよ。とにかく、このファームの伝統だからね」

並木は無理やり押しつけるように言い、作り笑顔で念を押してから小穂の部屋を出ていった。

「フォン」にいた頃は、同い年や年上の部下などは当たり前前存在だったから、そういう相手に業務を指示したり教育したりすること自体に抵抗を感じるわけではない。

ただそれは、社長である父の威光があつて成り立っていることでもあつた。同じ感覚で今の職場を語ることはできない。また、瑞季はプライドが高く、たかだか半年早くヘッドハンターになっただけの相手に先輩面されることをおとなしく受け入れる人間だとはとても思えない。

とりあえず打ち合わせに同行させるだけさせて、ある意味、「ゼロエトワール」の自分のときと同じように、あとは勝手に動いてもらうというやり方が一番無難ではないか……小穂はそんなふうな考えを結論づけ、午後に入り、時間が近づいたところで、瑞季の部屋のドアをノックした。

「細川さん、ちょっといいかな」

これから一件、打ち合わせに行くので、一緒に付いてきてほしいと話す、彼女は意外にも素直に「分かりました」と応えた。

どうやら、並木から話は通っているようだ。

「行きましょう」

瑞季はきびきびと支度を済ませると、バッグを手にして言った。

それにしても、表情が明るい。念願のコンサルタントを任されて、前向きになっているのか。

ついでに性格も丸くなってくれば言うことはないかと、思わずにはいられない。

「どこに行くんですか？」

オフィスビルを出て、駅に向かおうとしたところで、瑞季が訊いてきた。

「二見鞆」っていう、ビジネスバッグメーカーの会社」

「どこにあるんですか？」

「湯島だけ」

「じゃあ、タクシーで行きましょうよ」

「え……でも、まだ正式に依頼されたわけでもないし」

「そんなの、いいじゃないですか」瑞季は言う。「並木さんだって、渡会さんだって、ばんばんタクシー使ってますよ。私、移動中に二、

三、アポ取りたいんですよ」

「あ、そうなんだ……」

それなら仕方ないかと、タクシーを使うことに同意する。とはいえ、言い出した瑞季が後ろで突っ立っているだけなので、タクシーを止めるのは小穂の役となった。

釈然しゃくぜんとしない思いを少し抱えながら、タクシーに乗りこむ。

「あ、青木さんでいらっしやいますか。初めまして、私、「フォルテフロース」のコンサルタントをしております細川と申します……」

瑞季は早速、どこかのアポ取りを始めている。脚あしを組み、手帳を広げ、いかにもやり手キャリアウーマンといった様子である。

「これから行く〔二見鞆〕だけ……」

彼女の電話が終わるのを待ち、打ち合わせに当たったの最低限の情報は伝えておこうと、小穂は口を開いた。

「あ、大丈夫です」

ところが瑞季は、それを拒否するように言った。

「え……何が？」

「私はただ、並木さんに言われて、見学させてもらうだけです。鹿子さんの仕事を取るつもりはありませんから」

その、いかにも、この世界の道理をわかまえていますと言いたげな口ぶりが、逆に面白くない。

「でも、同行してもらおう以上、着手することになったら、細川さんにも動いてもらわなきゃ」小穂は言ってやった。

「もちろん、鹿子さんがもたもたしてたら、私のほうで、さっさとやっちゃうかもしれませんけどね」

「そう……ははは」

言い方きついなあ……小穂は笑みを引きつらせながら思う。

「どこから来た話なんですか？」

それだけ聞けば十分というように、瑞季は問いかけてきた。

「社長がクラブに飲みに来てね」

「ああ」

彼女の相槌には、理解したという意味のほかに、くだらないもの

を切り捨てるようなニュアンスが混じっているように聞こえた。

「細川さんは、夜のバイトは興味ないの？」

何となく訊いてみると、鼻で笑われた。

「あるわけないじゃないですか。私は誘われても断りますから」

ということは、瑞季は誘われていないのだ……花緒里も人を見て声をかけているのだと思う。

クラブというのは働いてみると分かるが、もちろん圧倒されるような美人中にはいるものの、そこまでの器量が備わっていないくても、あいそ愛想と気遣いでそこそこ戦力になれる仕事である。

逆に言うと、いくら器量がよくても、つんつんしては仕事にならない。客からストレートに、お前はこの仕事に向いていないと言われてしまう。つまらなかつたら向こうに行けよと言われてしまう。そう言われて裏で泣いているホステスを、小穂も実際に見ている。

瑞季はどうか……想像してみるが、楽しそうに接客している光景は思い浮かべられない。

「ファームの女性陣、みんながみんな、夜はホステスだなんていうのも困りますしね」瑞季が冷笑混じりに言う。

自分こそがファームの良心だとも言いたげだ。

「でも、現実、私たちの歳でコンサルやるとなると、人脈がないから大変だよ」

小穂は少しばかり先輩風を吹かして言ってみた。

「それも別に大丈夫です」

「え……？」

「私はコンサルになるつもりでずっと働いてきましたから、前々から交流会とかに出て人脈は作ってきてますし、リサーチの仕事を何年もやって、キャンディデイトの探し方も分かってます」

「あ……そう」

案の定、どちらが先輩か分からなくなってきた。というか、この

業界では彼女のほうがずっと先輩なのだ。

「あと、一言言っておきますけど、私、鹿子さんをライバル視してるとか、そういうことは一切ないんで、そこはよろしく願いします」

「……私もそんなふうには見てないけど」

意識されているように感じていたのだが、そう言われてしまえば、そう応えざるをえない。

「私は、渡会さんを超えることしか考えてませんから」

つまり、小穂は眼中にないということらしい。

「十年後には、このファームのトップに立つつもりでやりますから」

「そう……が、がんばって」

どこかで聞いたようなキャリアプランを本気で立てている人間を前にして、小穂はたじたじになるしかなかった。

考えが浅いのか深いのかは、よく分からないが、そんな意気込みを聞かされてしまうと、自分の案件に付き合わせるのも申し訳ない気持ちになってくる。

やりにくい。

「いやあ、狭いところで悪いね」

湯島の「二見鞆」本社を訪れると、二階の社長室に通された。書

類が机や棚に積み上がっていて雑然としている。壁沿いにはちよつとした作業机もあり、そちらは工具などの整頓が行き届いていたが、どちらにしても、こぢんまりした部屋の中にそれらがあるので、小穂たちがパイプ椅子を並べて座るスペースも、ぎりぎりというところだった。

「ほう、かのこさんは名字だったのか」

名刺交換すると、クラブで知り合った相手からよく言われる言葉を、二見も愉快そうに口にした。今日はワイシャツのネクタイ姿に紺のカーディガンを羽織っている。そして、革のハンチング帽はこの前と一緒だ。

「しかし、ヘッドハンターとは思わなかったな」

よほどおかしかったのか、二見は電話でも触れた話をまた口にして笑った。瑞季は、何がおかしいのかというように、無表情で彼を見ている。

「ごめんなさい」小穂は首をかすかにすくめる。「あの店のバイトは、もともと、昼の仕事の人脈づくりになると思ってたんです。でも、社長に言うのは、本当に迷いました。社長、病気のことおっしゃってたじゃないですか。だから、まだまだ現役でがんばってほしいっていう気持ちのほうが強かったし、後継者の悩みなんかも、ともに受け取るほうが失礼なんじゃないかって考えてしまっ……」

「うん、鹿子さんの言いたいことは分かるよ」二見は言った。「でも、これは待ったなしの問題なんだ。ちゃんと言わないと切実さが伝わらないから言うが、私の身体はがんにやられてしまっていて、一通りの治療はしたんだが、残念ながらお手上げだ。少なくとも、この先治る見込みはないし、私自身、今年の桜が見られるかどうかは分からないと思ってるんだよ」

淡々とした口ぶりとは裏腹の、余りにも重い告白に、小穂は返す言葉をなくした。

「まあ、これ自体は嫌だと言っても、どうにもならないことでね。これが天寿てんじゆということだと思ってる……というか、そう思うことにした」

二見はさばさばと言い、小さくうなずいた。

「ただ、そうなると心配なのは、この会社だ。形式的に専務や取締役はいるが、経営上決めなきゃいけないことは今まで、大きなことから小さなことまで、全部私がやってきた。だから、あとを託す人間が育ってない。そりゃあ、できることなら、中の人間に継いでほしいよ。だけど、冷静になって考えてみると、経営に関しては経験のある誰かに任せてしまって、企画部門や製作部門は今まで通りいじらずにやらせたほうが、うまくいくんじゃないかって気がしてね。どこかから、いい人をヘッドハントしてくれるなら、それに期待し

てみたいと思った……そういうわけなんだ」

社長というのは、自分の命より何より、会社の行く末を案じなければならぬのだ……小穂は二見の話を聞きながら、その職責の重さをひしひしと感じた。

「分かりました」小穂は表情を引き締めて応えた。「何とか、社長に安心してもらえるような方を探したいと思います」

「頼むよ」二見は小穂の意気込みを敏感に感じ取ったように、にやわ柔和な笑みを見せた。

「こういう人がいいっていうようなイメージや条件はありますか？」小穂は訊いた。「あるいは、どここの誰々みたいな人っていう具体的な話でもいいですし」

「ははは、そう言うと、その人を引き抜いてきてくれるのかい」二見は笑う。「あいにく、目をつけてるような人間はいないんだよな」

「かばん業界の方がよろしいですか？」

「もちろん、そういう人も候補になるだろうけど、むしろ、そうじゃないほうがいいんじゃないかとも思うんだ」二見は言った。「イメージで言うならね、経営だけをやってくれる人だ。現場のことは現場に任せておけばいい。連中はそれで十分やってくれるし、連中で決められないことは、こちらに話を持ってきてくれる。かばん作りのいろはも分からずに、かばん屋の経営ができるかって話なんだけ

ど、勘のいい人ならできると思うんだよ。もちろん、会社を動かしていくうちに、かばんの何たるかも分かってくるだろうよ。それでも現場のことは現場に任せようって、どっしり構えてくれる人がいかもな」

「なるほど」

プロ経営者のようなタイプがいいのかなと小穂は考える。しかし、攻めの経営というよりは、守りの経営を求めているようにも思う。

「それから、外との交渉事が好きな人間だね。うちの連中は、製作のトップも企画のトップも、優秀な人間には違いないんだが、かばん作り以外のこととなると、たちまち頼りなくなる。だから、中の連中を説得したり、外の相手と渡り合ったりすることが一人でうまくできる人間じゃないといけない」

「後継者には、会社をどうしていつてほしいと思いますか？」小穂は訊いてみる。「もっと大きくしてほしいとか、こういう分野に進出してほしいとか」

「いやあ、そういうのは、その人の才覚次第だ。私自身、それほど、この会社を大きくすることはできなかった。ぜいたくは望まないよ」「今の規模を維持してくれればいいし、もっと大きくできるなら、どんどんやってもらって構わないと……?」

「そうだな」二見は言う。「ただね、何をやってももらっても構わない

ってことでもない。守ってほしいのは、「二見」のかばんはすべて、メイド・イン・ジャパンだってことだ。外注品にしても、頼む先は国内の職人さんだ。いくらコストが高くついても、企画から製作まで、国内で一貫して行う。日本のかばん作りの職人芸を守り、後世に向けて作り手を育てていく。その気概だけは失わないでやってほしいんだよ」

決して大手とは言えない規模であっても、高潔な誇りと使命を持って会社を構えているのだなど、小穂は感銘を受けた。

小穂がいた「フオーン」でも、事業の原点であるキャンプ用品などは、自社生産であったり、腕のいい町工場に依頼したりと、メイド・イン・ジャパンに徹している。しかし、ウェアなどは、マレーシアの工場が生産拠点の柱だ。もちろん、それでも高い品質を保てるという見込みがあつてのことだが、海外生産戦略を取らないことには、ライバルブランドと戦えないという面が大きい。

バッグも、そこそこ良質で安価な海外生産品と戦っていかなくてはならない世界だろう。いくら品質がよくても、それなりの値付けをしなければならぬとなると、今度は顧客訴求力の高い、高級ブランド品との勝負になってしまう。そんな中でメイド・イン・ジャパンを貫いていくのは、簡単なことではない。

「あとはまあ、同じことだけど、現場の人間たちの努力に報いてや

ってほしいってことだな。うちの人間だけじゃない。外注先に対しても同じだ。利益を確保したいからって、労賃を値切っちゃ駄目だ。逆に販売店に対しても、卸値おろしねをたたこうとしたり、バーゲン用の商品を寄越せなんて、うちの価値を下げようとするところは、ちゃんとやり合わなきゃいけない。仕事相手とはウインウインの関係じゃないとな」

いいこと言うなあと小穂が感服していると、今まで小穂の隣で黙って座っていたただけだった瑞季が口を開いた。

「失礼ですが、社長は、奥様やお子様はいらっしゃらないんですか？」
タクシーの中で打ち合わせできていたら、それくらいは教えていたのと思ったが、言っていないものはしょうがない。二見は少し、表情を曇らせた。

「だいぶ前に別れてね、どちらにしても、その別れたかみさんも、五年前に死んじまった」

「お子様は？」

「息子が一人いるが、かみさんと別れたときに、向こうに付いていて、まあ、簡単に言えば、私は嫌われちまつてる。ときどきはこっちから、どうしてるって電話はするが、まあ、大した返事もくれないよ。かみさんが死んだときも教えてくれなかったくらいだからね」

「でも、息子さんがいらっしやるということは、社長がもしものときは、会社の株式など、息子さんが相続されるわけですよ。そのへんはどうされるんですか？」

瑞季なりに言葉は選んでいるらしいが、質問の中身に遠慮はなかった。

「うん、それも今、弁護士と相談しているところだね。まあ、何らかの形で会社名義にしておくつもりだ」

「だったら、いいですけど」瑞季は言った。「せっかく新しい社長を呼んでも、株を持った息子さんに引っくり返されたり、引っかき回されたりしないとも限りませんからね」

「あいつにそんな色気はないよ」二見は寂しそうに笑う。「それくらいの色気があるんなら、とつくに跡継ぎにしてるくらいだ」

「二見鞆」のような規模の会社であれば、社長の子息が跡を継ぐのは、むしろ自然なことである。二見は創業社長でもあるのだし、彼がそうすると言えば、異を唱える者はいないだろう。

二見自身も、その考えがないわけではなく、できればそうしたいのだ。しかし、息子との仲がそれを不可能にしているのだ。

「息子さんは今、何をされてるんですか？」小穂は訊いてみた。

「目黒のほうで店を持つてるよ。インテリア家具の店だ。もう十年以上、続いているから、軌道に乗ってるんだらう。そっちのほうは心

配してないよ」

「そうですか……」

「まあ、私にとっては、この会社自体が子どもみたいなものだ」二見は、どこか強がるように、そう言った。「だから、何とかいい人にあとを任せたいと思ってる。そのへんの思いを汲んで、一つ探してくれないかな」

「分かりました」

小穂は素直に返事をした。

年俸など条件の話をしたあと、二見は三階にある工房を案内してくれた。

作業台のかたわらにマシンが並んだ工房には、七人ほどの男たちが働いていた。意外と若手が多く、二、三十代と思しき職人も四、五人いる。

「デザインは企画部のデザイナーが上げてくるんだが、職人にもある種のデザインセンスが必要なんだよ。平べったく伸ばされた革が、こうやって立体的な構築物になるわけだからね。昔は職人がデザインから何から、一人でやったもんだ」

二見は棚に重ねられた革や、出来上がったバッグを指しながら話す。革の、なめした匂いが鼻をくすぐる。

「革つてのは、一枚一枚、表情から質感から、微妙に違うんだよ。かばんのどの面に、どの革が合うかっていうのも、ちゃんと見極めなきゃいけない。それから、このコパの処理ね、ここに職人の腕が出る……」

コパとは、革の切り口のことである。切断面をそのままの状態に出さず、うまく処理することで、その製品は洗練されたものに仕上がっていく。ゆつくりとした口調ながら熱心に語ってくれる二見の話を、小穂は感心しながら聞く。

「このコパを薄く削るだけでも、コツがいるんだよ。うちは品質管理が厳しいから、この連中はどこの工房でもやっていける。独り立ちする職人も多いよ。かばん作りなんて、ミシンと工具があれば、どこだってできるからね。自宅の一部屋を工房にして、フリーランスで気楽にやってるOBもいる。腕は確かだから、引き続き、うちの製作も頼んでるんだ。革物の外注はそういうのばかりだから、実質、自社生産と同じだよ」

誇るように話していた二見が、工房の中では一番のベテランと思しき、五十代の男のところまで進み寄った。

「彼が職人のトップ、製作部長の瀬川だ。取締役でもあるんだが、経営のことなんてまるで興味がなから嫌になるよ。ただ、それだけあって、腕は俺より立つ。それから、意外と若手に慕われててね、

寡黙^{かもく}だけど根が穏やかだから、今の若者はがみがみ言われるより、
こういう先輩のほうが付いていきやすいんだな。まあ、うちの生命
線だ」

ベテラン職人とはいえ、老社長と並べばひよつこの趣^{おもむき}だ。べた
褒めされて、困惑するように肩をすくめている。

「こちらのお嬢さん方はヘッドハンターをやつてらっしゃる。この
間もちよつと話した件でね、いろいろ相談に乗ってもらうことにし
たんだ。まあ、あとで改めて話すよ」

二見からそんな説明を受けた瀬川は、小穂たちにちらりと目を向
けて会釈^{えしやく}すると、すぐに手もとの仕事へと戻った。

「この工房とともに、車の両輪になるのが、上にある企画部だ。美
大を出たデザイナーがそろつてる」

二見に案内された四階の企画部は、雑然としていた工房とは打っ
て変わって、モダンなスタジオのような部屋だった。白いワークテ
ーブルにパソコンが並び、私服姿のデザイナーたちが黙々と仕事を
している。

「かばんのデザインっていうのは、ただ、格好いい形を描き出せば
いいってもんじゃない。かばんは物を運ぶ道具だからね、ちゃんと
物が入りやすくないといけないし、持ったり肩にかけたりが快適に
できないといけない。丈夫でなけりゃいけないし、重すぎてもいけ

ない。そういう使い勝手までを突き詰めるのがデザインだ。革にするナイロンにしる、素材の特性や加工の仕方、これはできる、これはできないってことを理解しないと駄目だ」

二見は空いている椅子に腰かけて、ふうと息をついた。

「ただ、逆に、無難なデザインでも面白くない。職人たちに、難しいけどやってやろうじゃないかって思わせるようなのが、いいデザインだ」

彼は目の前に置かれていたデザイン画の束をべらべらとめくってみせ、それから、奥の席でパソコンのマウスを動かしている男のほうに手を振った。

「あそこにいるひげの男が原田と言って、この部長だ。武蔵美むさびの工業デザインから新卒が入って、今じゃあ専務の次の古株になった。美大からは何人も採ったが、あいつが一番の天才で、一年目からどんどん企画を出して、商品化まで持っていたよ。ただ、集中すると周りが目に入らなくなっちゃう。電車で隣に座った人のかばんを思わず勝手に触っちゃって、警察に突き出されそうになったこともあったくらいだ」

「それは危ないですね」小穂は笑った。

「やりたいことを好きにやれていう、企画部の空気は、あいつがいてこそものだ」目を細めて話していた二見は、そこでまた、ふ

うと息をついた。「まあ、こういう会社だよ……ちよつと疲れたな」

「大丈夫ですか？」小穂は恐縮しつつ、礼を言った。「わざわざありがとうございます。案内していただいて、本当に参考になりました」

ヘッドハンティングは秘密裏に行われることが多いため、社内を案内してくれるようなクライアントは少ない。こうやって社員の顔を見て、社内の空気を感じ取ることができると、どんなキャンディデートがいいかというイメージもふくらませやすくなる。

「時間があったら、丸の内の店も覗いてみたい。女性スタッフもいるし、店長の野々宮ののみやっていう男には、何でも教えるように言っておくから」

自分の会社によほど自信があるのだろう。隠すようなことは何もないということだ。

「じゃあ、私もここでもうちよつと休んでいくから、見送らなくて悪いが」

そう言う二見に、「けっこうです。ありがとうございます」と返して、小穂たちは「二見鞆」をあとにした。

いい会社だなと思った。

ヘッドハンティングを虚業などと切り捨てていた頃とは自分の考えも違ってはいるが、それでもこういう、手をかけて質のいい物を作って売っていいこうとしている会社には、規模の大小に関係なく、

得がたい価値を感じてしまう。志にどっしりとした揺るぎなさがある。いつの時代になろうと、この国でなくしてはいけない存在だと思ふ。

「社長も早く安心したいだろうし、早急にロングリストを作ろうか」
帰りのタクシーの中、小穂は、やる気に逸はやったままに、瑞季にそんな声をかけた。

「言いましたよね」しかし瑞季は、冷ややかに言い返してきた。「これは鹿子さんの案件ですから、鹿子さんのほうで動いてください。私は後学こうがくのために見学させてもらうだけですし、自分の仕事で早く結果を出さなきゃいけませんから」

「あ……そうね」

二見の話聞いて、何も感じなかったのだろうか……相変わらずのすげない返事に、小穂は残念な気持ちになった。

まあ、いい。

自分の手で何とかしてやろう。

気持ちを切り替え、そんな決意を新たにした。

〈つづく〉